

▶▶▶加藤裕治

路面電車という発想

かつて餃子ギョウザの支出額で日本一を浜松市と競っていた宇都宮市に8月末、LRT（ライトレールトランジット）が開業した。LRTとは端的にいえば路面電車である。私も浅い鉄道ファンゆえ、早速乗車してきた。JR宇都宮駅から市街の東部へと向かい、芳賀・高根沢工業団地を終点とする、片道およそ50分の路線だ。乗り心地、使い心地ともに大変素晴らしい。

駅は道路に面しているので、地下鉄のように長い階段やエスカレーターを使わなくて良い。低床式車両だからホームと列車の間に全く段差がなく、高齢者や車椅子での利用も便利だ。最高時速は40km/h以下と定められているが、その速度は車と自転車の中間なので、街に違和感なくなじむのである。獅子文六に『ちんちん電車』というエッセーがあるが、これほど「乗り心地のいいものはない」と路面電車（都電）を称賛している。その通りなのである。

これほど褒めると、単なるノスタルジアと思われてしまいそうだが、そうではない。世界では一度廃止された都市も含めて、路面電車が次々と復活している。技術改良が進み低コストで大規模輸送ができ、環境にも優しく、バリアフリーの乗り物で利用しやすい。「歩きやすい街つくり（土居靖範）」との親和性が高いのである。

あのテレビ番組では、このLRT開業に対して、速度が遅いことを課題とし、地価上昇のためにも法改正が必要だと論じていた。路面電車を取り上げ「速さ」が「お金」を生むと結論づける語り方は、やばなだけでなく、価値観が一昔前ではないか。

とこのも路面電車の発想とは、街と人が心地よく共存できることを目指すものだからだ。獅子文六もその心地よさを「スピードを出さないこと」にあるとする。そもそも「速さ」が追求され始めた時代に、路面電車は次々と消えた。しかし今、路面電車が復活しているのはなぜか。先のテレビ番組は、それをじっくりと考えようとはしない。そうした態度こそが、路面電車の発想の対極だと気づいているだろうか。

（静岡文化芸術大教授）

2023年10月8日

中日新聞（朝刊）p.7